

実習やボランティア参画による学生の学び

野中 千都

Students' Progress of Learning through the Planning and Participating the Volunteer Works and Child Care Practice

Chizu Nonaka

1. はじめに

(1) 保育者を目指す学生の、保護者や地域との関わり

保育士や幼稚園教諭（以下、保育者と表記）を目指す学生の多くは「子どもが好き」という気持ちを持って保育者を目指す。保育者になった時にはどのような保育者になりたいのか問うと、子どもの成長や関わりにやりがいを見出していることが多く聞かれる。

ところが、保育者の仕事は子どもと関わることだけではない。保育所や幼稚園においては、子どもの保護者と日常的に接する。その保護者や地域社会との良好な関係を構築することで、保育の対象である子どもによりよい育ちを支えるものと考えられており、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園保育・教育要領にも、保育者の役割として保護者支援や保護者との関わり（地域社会への子育て相談や助言などを含む）の重要性が示されている。以下は、それらについて、保育所保育指針および幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園保育・教育要領から抜粋したものである。

[保育所保育指針](平成20年3月)

第1章 総則 2 保育所の役割

(4)保育所における保育士は、(中略)保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもの保育をするとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである。

[幼稚園教育要領](平成20年3月)

第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項
第1 指導計画の作成に当たっての留意事項
1 一般的な留意事項

(8)幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること。(中略)また、家庭との連携に当たっては、保護者との情報交換の機会を設けたり、保護者と幼児との活動の機会を設けたりなどすることを通じて、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるように配慮すること。

[幼保連携型認定こども園保育・教育要領]

(平成26年4月)

第1章 総則 第3 幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項

6 保護者に対する子育ての支援に当たっては、(中略)、子どもに対する学校としての教育及び児童福祉施設としての保育並びに保護者に対する子育ての支援について相互に有機的な連携が図られるよう、保護者及び地域の子育てを自ら実践する力を高める観点に立って、次の事項に留意するものとする。

- (1) 幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援
- (2) 地域における子育て家庭の保護者等に対する支援

大学の保育者養成課程においては、各教科目の中で子どもの育ちに関わるだけでなく、保護者や地域の子育て支援に関わる内容等についても学ぶ。保育実習(保育所や児童福祉施設)や教育実習(幼稚園)では、養成課程の中で学んだ理論を実践と結び付けて学びが深いものとなるよう理論と実践の融合を図る。子どもの発達や保育内容などに関しては、保育実習や教育実習時間のほとんどの時間で実践的に学び、養成課程の中での学びを実習という場で実践と結び付けながら学ぶことができると思われる。しかし、保護者や地域との関わりに関しては実践的に学ぶことは少ない。保育実習や教育実習においては、地域との関わりは日常にはないとしても保護者との関わりに関しては、日常に必ずあると推察される。保育所実習や幼稚園教育実習においては、送迎時のあわたたしさは推察されるが、保護者と保育実習生のかかわりとしてあいさつ程度はあると思われる。保育相談支援(保育指導)技術(柏女他 2010)の言語的援助の中の「会話の活用」には「保護者との関係構築を目的として、挨拶、日常会話などを意図的に活用する」⁽¹⁾ことがあげられており、実習において学生が保護者や地域の人へ挨拶を行うのは、保護者との関係構築の大切なきっかけになっているものと思われる。

学生にとっては、実習や日常生活の中で乳幼児の保護者に関わるのが少ないことや、ボランティア活動をしていなければ、地域社会との関わりが希薄なことは想像できる。保護者や地域との関わりが少ないことに対して、学生はどのように考えているだろうか。

学生が保護者との関わりについて不安を抱えていることは、佐々木ら(2011、2012)がアンケート調査を行い考察している。その中で、保護者に対しての学生イメージは半数以上が「怖い」であったことが示されている。しかし、本学の発達支援センターで行われている「親子教室」への参加後は、保護者に寄り添うような学生の意識の変化がみられたと述べられ、学生が

保護者や地域社会と関わる機会を持てるようにするなかで、学生の保護者支援の実践力が育っていることが推察できる。

2. 目的

保育者を目指す学生は、保育実習や教育実習あるいはボランティア活動において、保護者や地域住民との関わりの学びをどのように習得しているか、また、異年齢者との関わりをどのように習得しているのだろうか。本稿では、学生に行ったアンケートやボランティアに参画した学生の振り返り文書からそれらを考察する。

3. 方法

(1) 実習やボランティア活動における保護者や地域社会との関わり

保育士資格取得および幼稚園教諭免許状取得に関わる単位実習をすべて終了した本学教育学部児童幼児教育学科幼保系学生の4年生を対象としアンケートを実施した(2014年11月、回答者109名)。さらに、アンケート内容については次のように設定を行った。

まずは、実習における保護者や地域との関わりに関しての内容である。保護者支援や地域の子育て家庭への子育て支援に関わる学びで実践的な学びが10日間の中で少なくとも得られると推測される実習としては、保育所実習A・Bおよび幼稚園教育実習A・Bが当てはまるためアンケートの内容対象とし、施設実習A・Bは、施設種別の複雑さや入所者の背景を推察し、保護者や地域社会との関わる学びが少ないと推測されるためアンケートの対象とはしていない。また、全員が履修する必修実習かつ少人数での実習として、3年次夏期の保育所実習Aと4年次秋期の幼稚園教育実習Bをアンケート内容対象とした。実習においては保護者や地域と深くかかわり実践力をつけるという時間までは確保されにくいと推測するため、あくまでも「関わり」とした。「関わり方」については、関係構築のきっかけを尋ねた。送迎時のあいさ

つで関係構築を図ったのは「あいさつ程度」、挨拶に一言追加して関係構築を図ったのは「簡単な会話」、それ以外のものを「その他（自由記述）」とした。

次に、ボランティア活動における保護者や地域との関わりに関する内容である。ここでも実習における保護者や地域との関わりに関する内容と同様に「関わり」について尋ね、関わり方や保護者支援や地域支援については自由記述とした。

最後に、異年齢との関わり方についての学びについて尋ね、自由記述とした。保護者支援や地域の子育て支援に関わるうえでは異年齢者とのコミュニケーションが必要となるが、まずは関わりを持つ意識が必要となる。したがってどのような関わりを持ったのかについての自由記述とした。

(2) 城南区との連携活動「のびのび夢ひろば じょうなん」への参画

「のびのび夢ひろばじょうなん」は、PLAY FUKUOKA、中村学園大学・中村学園大学短期大学部児童文化部 PEC、同大学教育学部学生、福岡大学児童文化部、市民グループ、城南区役所等様々な団体がボランティアとして参加する城南区の子育て支援事業であり、2014年9月7日（日）に城南市民センター横で行われた。本学の学生は計画の段階から参画している。学生の参画内容と振り返りは文書にて提出、考察を行う。

4. 結果および考察

(1) 実習に関するアンケートより考察

保育実習（保育所実習 A、B）や教育実習（幼稚園教育実習 A、B）での保護者との関わりの有無を尋ねたところ、「関わった」との回答は 99% で「関わらなかった」は 1% だった。

幼保系学生は、幼稚園教諭免許状および保育士資格の取得を目指しており、幼稚園教諭免許状の必修科目として「幼稚園教育実習 A」（付

属幼稚園、3 年次 6 月）と「幼稚園教育実習 B」（外部幼稚園、4 年次 9 月）を履修する。また、保育士資格の必修科目として「保育所実習 A」（3 年次 8 月）を履修し、選択必修科目として「保育所実習 B」（3 年次 2 月、施設実習 B との選択必修）を履修する。その実習の中で、保護者と関わる主なものとして送迎時が考えられ、ほとんどの学生が実習中に保護者との関わりがあったようである。

図 1 に示すのは、実習での入所乳幼児の保護者との関わりの内容である。単位実習の中でも、最初の外部園による実習である保育所実習 A（保育士資格必修）と、集大成として最後の外部園による実習である幼稚園教育実習 B（幼稚園教諭免許状必修）の二つの実習での保護者との関わりを示すものとする。

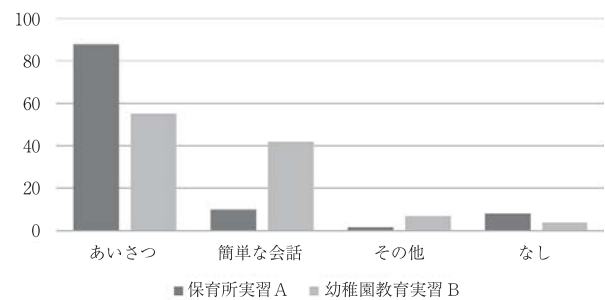


図 1 保護者とのどのように関わったか

内訳は、3 年次夏期の保育所実習 A では 92% の学生が、4 年次秋期の幼稚園教育実習 B では 95% の学生が保護者と関わったと回答している。実習を重ねるにつれ、わずかながら関わる率が上がっている。関わり方の内容としては、図 1 で示されるように、実習を重ねるにつれ、より関わろうとする態度がみられることがわかる。初めての外部実習である保育所実習 A では、挨拶を交わす程度の関わりがほとんどだが、最後の外部実習である幼稚園教育実習 B では挨拶を交わす程度が約半数、挨拶だけでなく簡単な会話を行った学生が 4 割弱となっている。積み重ねた実習経験での保育者の保護者への関わりを通して学んだり、大学での学びを積み重ねたり、実習以外での学びの時間があつた

ものと推察される。また、その他として、保育参観や運動会などの行事が予定された実習期間ということもあり、親しく話しかけられたり、行事のことを聞かれたりしたというような記述がみられた。挨拶やそれに付随した簡単な会話から、より親しみのある関わりが持たれたようである。

次は、保育実習（保育所実習 A、B）や教育実習（幼稚園教育実習 A、B）での地域の人との関わりの有無である。3年次夏期の保育所実習 A では19%が、4年次秋期の幼稚園教育実習 B では28%の学生が地域の人と関わったと回答している。どちらも学生が地域の人との関わりを持った割合は少ないが、実習を重ねるにつれ、関わる率が上がっている。関わり方の内容としては、図2で示されるように、保護者との関わりと同様に、実習を重ねるにつれ、より関わろうとする態度がみられることがわかる。

ほとんどの学生が実習中に乳幼児の保護者と関わっていたのと異なり、10日間の実習の中では地域の人と関わることは日常ではないと推察される。園で行われる行事などでも、地域の人に関わるものばかりとは言えず、その機会は限られると想像される。

簡単な会話の割合は、幼稚園教育実習 B のほうが若干多くなるが、保育参観や運動会などの園行事と重なる時期の実習であることが考えられるため、地域の人と関わる機会があったのかもしれないことが想像できる。実習は、大学で学んだ理論と実践を融合させるものであるが、保育者に求められる「保護者との関わり」や「地域との関わり」の実践的学びは必ずしも実習内容に計画的に組み込まれていない場合が多い。しかしながら、挨拶を交わすことなどの日常的なかかわりの積み重ねで保護者との信頼関係や地域との関わりが生み出されることにも気づく記述もあった。

保護者との信頼関係や地域との関わりにおいて、会話の活用という日常的な行為が重要である。今後の保護者支援では専門性に根ざして会

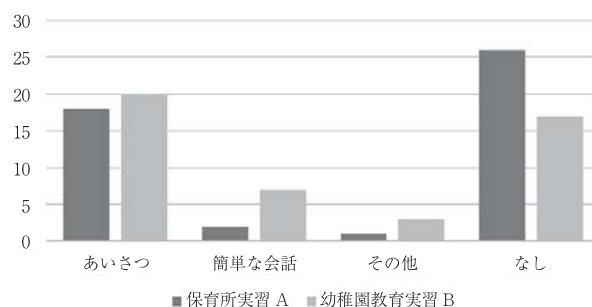


図2 地域の人とどのように関わったか

話の活用を意図的に行うことの必要性を実習指導等の授業の中で考察する機会を作るなど、専門性の実践力を向上させる取り組みを探りたい。

5. ボランティア活動における保護者や地域との関わりについての学び

実習に関するアンケートと同様に、ボランティア等での乳幼児や地域の人との関わりについてのアンケートを行った（前掲）。結果として、回答学生の49%がボランティア活動で乳幼児の保護者や地域の人との関わりがあったことが示された。

自由記述を見てみると、保護者との関わりの中では、「保護者同士が関わる場を作ることが大切」など、場づくりの重要性について考察し学んだ記述がみられたり、「まずは明るく積極的に挨拶することが大切と学んだ」など、保護者と関わる場合のコミュニケーションのきっかけを学んだ記述がみられたりした。また、直接、保護者と話す機会を得ることで保育者としての役割に関することも実践的に学んでいる様子が見られた。さらに、ボランティアにかかわるスタッフから学んだことの記述も見られた。

同様に、地域の人との関わりの中では、「地域の人の子どもに対する理解がどのようなものであるか知り、考える機会を得た」など、学びを実感できるような記述がみられた。

ボランティア活動は、保育者を目指す学生本人の意思が必要となり、その積極性にゆだねるところが多い。しかしながら、授業を担当する

養成校教員が大学での理論と実践を融合させた授業展開を行うことで、学生自身がリアリティを持って学べると思われる。

(1) 「のびのび夢ひろばじょうなん」への参加による学び

現在、地域で子どもの育ちを支えあうことが求められている。城南区の子育て支援関連イベント「のびのび夢ひろばじょうなん」へ参画した学生の声より、その学びを考察する。当日は800名を超える参加親子と、多くのボランティアスタッフで盛況となった。

活動内容としては、児童文化部 PEC は造形活動として遊びのコーナー企画および実施の参画をした。他のボランティア学生は、他の企画コーナーのサポート参加となった。参加学生は、本学教育学部の学生で18名であり、その18名すべてが振り返り用紙を提出している。以下、参画及び参加学生の気づきをまとめたものである。なお、各タイトルについては、①は新澤（2014）の地域の子育て支援の支え合いの場を形成するための工夫を参考に設定した。同様に、②と⑤は、保育所保育指針解説書の保育者の専門性の項目や地域における子育て支援の記載内容から、③と④は柏女（2010）の保育技術の項目などを参考にしながら設定し、学生の気づき記述を類似する内容に分類して記載した。

① [子育てを支えあう場づくりの支援]

- ・子育ての同じ経験を話し合える場を提供する大切さを学んだ
- ・子ども同士、大人同士、異年齢との関わりの中でそれぞれが関わっていた
- ・以前からの参加者などには職員が声をかける様子が見られた

② [保護者と子どもの関係構築への支援]

- ・子どもの様子を見ているだけの保護者には、一緒に活動に参加できるような声をかけた
- ・難しいところは保護者に声をかけ、親子の

つながりのある活動になるようした

- ・親子の関わりは実習では見ることが困難なため、参加したことで見られた
- ③ [「遊びを展開する」行動見本の支援]
 - ・制作したものを通して「家でもやってみよう」と親子が話していた
 - ・身近な物を使っての制作では子どもの工夫する姿を保護者に伝え、楽しめるようにした
- ④ [会話の活用による支援]
 - ・制作しながら、保護者の話を聞いたり、大学生話を話したりした
 - ・パン作りなどの説明をするところから、次第に話が弾んでいくことを実感した
 - ・保護者との関わりを大切にすることで、子どもの育ちの喜びを共有できると実感した
- ⑤ [地域子育て支援における地域との連携]
 - ・様々な人が企画・参加・連携することによって成り立っていた
 - ・地域が連携して活動することで、子育てによい環境が作られると思った
 - ・参加者が良い雰囲気づくりをすることで、参加者の笑顔が多く見られた
- ⑥ [その他]
 - ・実践的な子育て支援の場を見ることができた

子育てを支えあう場づくりの必要性はどのボランティア学生も感じたようである。参加数の多いイベントだったためか、子どもだけでなく保護者も意欲的に参加している様子が見られた。顔見知りと思われる親子同士だけでなく初対面と思われる保護者同士の関わりも随所に見られたためか、このような場づくりをすることに意義を見出したようである。また、このような場があることで、地域との関わりを持ちやすくなるという気づきもあったようである。保育者として保護者と子どもの関係構築に関わるとはどのようなことなのかも気づきがあったようである。子どもと学生のみだけではなく保護者

を巻き込むことで親子の会話が弾む様子を見て、保護者との関係構築を目的とした「あいさつ」「日常会話」を意図的に活用する子育て支援の方法の一端を学んだようである。事前の打ち合わせから「子育ての主体は保護者であること」「保護者も遊びに参加する主体のため、できるだけ保護者にも参加を呼び掛けること」がこのイベントで共通理解されていたことだったが、学生もその意識で関わったといえる。また、イベントでの活動がその場限りにならず、家庭へとつながる活動となるために、家庭にあるものを工夫して遊べるように遊びの展開を行動見本で示す企画をしたことも、学生の子育て支援ボランティアでの学びといえるだろう。

保護者やボランティアスタッフなどとの関わりは、普段の生活で同年齢と関わることの多い学生には、子育て支援だけでなく異年齢者とのコミュニケーションを学ぶ上でよい経験になったようである。コミュニケーションのきっかけとなる他愛のない会話を通し、気軽に話しかけたり話しかけられたりすることで、次の会話が生まれ、次第に話が弾んでいく様子も見られた。保育では、このような関係を積み重ねることで保護者との信頼を築く。その中で子どもの育ちの喜びを共有したり、悩みを相談したりできるものと思われる。

また、保護者や地域の子育て家庭の支援を行うためには、チームワークが必要となる。様々な立場で知識・技術を持ったスタッフが集まり、協働することで今回のようなイベントを開催できることが学生自身で実感できたと思われる。事前打ち合わせを重ねることで目的意識も共有でき、それぞれの力を発揮できる場となったものと考えられる。

ボランティア活動は保育者の資質を育てるものとして大きな学びを得られる場である。学生の参画および参加を積極的に促しながら、保育者養成の中で、挨拶などの日常会話を意識的に学生に経験させるような働きかけが養成校教員には求められるだろう。

(2) 異年齢者との関わりに関するアンケートによる考察

学生の多くは免許や資格を生かして就職するが、働くということは他者と関わるということである。保育所保育指針解説書には保育者の専門性として、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術②子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術、の6つが示されている。

直接的に子どもの育ちに関わることに限っては、学生自身が、大学での理論としての学びや実習先での実践としての学びを行っているため想像もしやすいと思われる。しかしながら、子どもと保護者の関わりを見守りながら援助するなどの関係構築の援助や、保護者や地域の子育て家庭への相談・助言などは、理論としての学びはあるものの実践としての学びが伴わず、不安を感じていることもあると推察される。他と同様に行ったアンケート（前掲）では、大学4年間の中で異年齢の人との関わりについての学びの回答を得ている。回答した学生すべてが記述を行っており、以下は類似記述をまとめたものである。

[サークルでの関わり] および [アルバイトでの関わり]

- ・ 気遣いや心配りを学んだ
- ・ きちんとお礼を言ったり、一緒に楽しんだりすることで、関係が良くなることを学んだ
- ・ 様々な年齢の人と関わる時の言葉遣いや、

言葉選択の必要性を学んだ

- ・相手の話したい気持ちを受け止めることの必要性を学んだ

[ゼミ活動での関わり]

- ・全体を見て、行動や言動などの判断することを学んだ

- ・メールの仕方やし話し方、聞き方を学んだ

[大学の中での職員との関わり]

- ・メールの仕方やし話し方を学んだり、相談の中で受け止められたりする実感が持てた

文献

- (1) 柏女霊峰、橋本真紀他『保護者支援スキルアップ講座』(2010)、ひかりのくに株式会社
- (2) 佐々木美智子、吉川寿美、森田真紀子、他「学生の保護者支援力向上のための授業実践について」(2011~2013)、全国保育士養成協議会第50~52回大会発表論文集、
- (3) 新澤拓治「親子が過ごす場の物的環境」(pp.174-175)、「支え合いの場を形成するための工夫」(pp.176-177)『よくわかる子育て支援・家庭支援論』(2014)ミネルヴァ書房

学びの多くが、年長者を中心とする異年齢者との関わりの中で学んだとの記述だった。大学の中でできることは限られるが、話し方や聞き方などのコミュニケーションの取り方や、意見を交わすことなど、授業やゼミでのかかわり、あいさつをきっかけとした日常の中でのかかわりにおいて、異年齢者として教員・職員が学生に向き合うことは学生の保育者としての資質を育てることにつながると思われる。

養成課程において、学生に保育職として身につけさせたいこととしては、子どもに関する知識や援助内容の知識、援助方法・技術など多岐にわたる。それだけでなく、挨拶や言葉遣いやマナーなどの社会人としては基礎的なスキルと思われるものも、「子どもと子ども」や「子どもと保護者」、「子どもと地域」など人との関係構築にかかわる保育者だからこそ意識的に養成課程で重視したい内容だと思われる。

今後の課題として、保育者養成校として保育者を育てる意識のもと、保育者の専門性とは何かを考察しながら、保護者支援や地域の子育て家庭への支援などの地域支援に関わる実践力を養うためにはどのような取り組みが望ましいのかについて研究を行うことがあげられる。そのための授業実践やボランティア参画の展開について探りたい。